

1. はじめに

八尾市では、8世紀後半に建立された称徳天皇と僧 道鏡ゆかりの由義寺跡において、平成30年(2018)2月13日の国史跡指定以降、史跡整備に向けた発掘調査を6次にわたり行ってきました。これら一連の調査で、由義寺塔基壇(上層基壇)[一辺21.6m]の規模や構築に関わる工法、上層基壇の下層で前身の建物となる塔基壇(下層基壇)[一辺約17m]を確認しました。

今回、上層基壇東側(約156㎡)の調査を行いました。

※下層基壇について

平成30年度、令和4年度、令和5年度の調査で、下層基壇の掘込地業【註1】を四方で確認し、これらの内側を結ぶと一辺約17mの塔基壇に復元できました。そして、下層基壇と上層基壇の東辺が、ほぼ同じ位置にそろえられていることもわかりました。

2. 調査成果

a) 下層基壇の東端を示す石列

下層基壇の東端付近で幅0.6mの石材(見切りの石)3点が、0.2~0.3m開けて並んでいました。基壇南側で実施した第5次調査でも同様の石列を確認しており、基壇各辺に一直線に並べられていたとみられます。この石列は、基壇土の流出を防ぐための土留めの機能をもっていたと考えられます。

b) 上層基壇の構築に伴う地盤補強の痕跡

上層基壇の構築のための整地土(層厚約0.2~1.5m)の最下部、湧水の激しい砂層の直上で、凝灰岩切石や瓦、多数の玉石(10cm前後の川原石)を確認しました。これらは人為的に敷き詰められ、整地に伴う地固めとして埋められたものと考えられます。

【凝灰岩切石】

15点以上出土しており、長さ80cm、厚さ26cmの長方形の石材など、下層基壇の切石積階段に使われた部材とみられます。今回の調査区は東階段想定箇所の北側にあたるため、整地にあたってこれらの石材が転用されたと考えられます。凝灰岩切石の一部は、第4次調査でも確認していましたが、下層基壇の基壇外装材【註2】と判明しました。基壇外装材は、寺院廃絶等に伴って移動・撤去されることが多く、上層基壇ではほとんど残っていませんでした。そのため、今回のような、多くの石材が残されている状況は貴重といえます。また、基壇外装の設置は、塔建物の建設後に行われるのが一般的で、出土した石材の表面が風化していることから、一定期間、塔が建っていたことを示しています。

これまでの調査成果から、上層基壇は最も格式の高い壇正積基壇【註3】に復元していますが、下層基壇についても、壇正積基壇かは明らかではありませんが、少なくとも切石積基壇であることがわかりました。

【瓦】

丸瓦・平瓦のみで、軒瓦は含まれていませんでした。どの瓦も残存状態は良好で、下層基壇の塔に葺かれていたものと考えられます。砂層に突き刺したものと敷き並べた瓦の出土状況から、単に廃棄されたものではないとみられます。

【玉石】

調査区南側の凝灰岩切石の直上に集中して落とし込まれていました。本来は下層基壇の周囲に敷かれていたものとみられます。

3. まとめ

今回、下層基壇の石列の検出と凝灰岩切石、瓦、玉石の出土から、由義寺塔の前身の塔建物が一度は建設されていた可能性が高くなりました。さらに、下層基壇の外側から出土した瓦の年代が8世紀中頃以降であることから、前身の塔完成後、さほど時間をおかずにより義寺塔の建設が行われたのでしょう。

このように、すでにあった一辺17m級の塔を解体して最大約1.5mもの地上げを行い、さらに基壇規模約1.3倍の一辺21.6mの塔を建設したとする一連の造営過程から、西京【註4】造営に伴い、国家の寺院にふさわしい塔に造り変えようとする称徳天皇の強い意志が感じられます。

【註】

- 1 建物の基礎となる地面を掘り下げ、内部をつき固めながら埋戻す地盤改良工事。
- 2 基壇土の外面を保護・装飾するためのもの。
- 3 凝灰岩や花崗岩などの切石により構築された基壇。葛石・羽目石・束石・地覆石で構成され、基壇建物の中で最も格式が高いとされる。
- 4 称徳天皇が弓削の地に造営をすすめた宮都

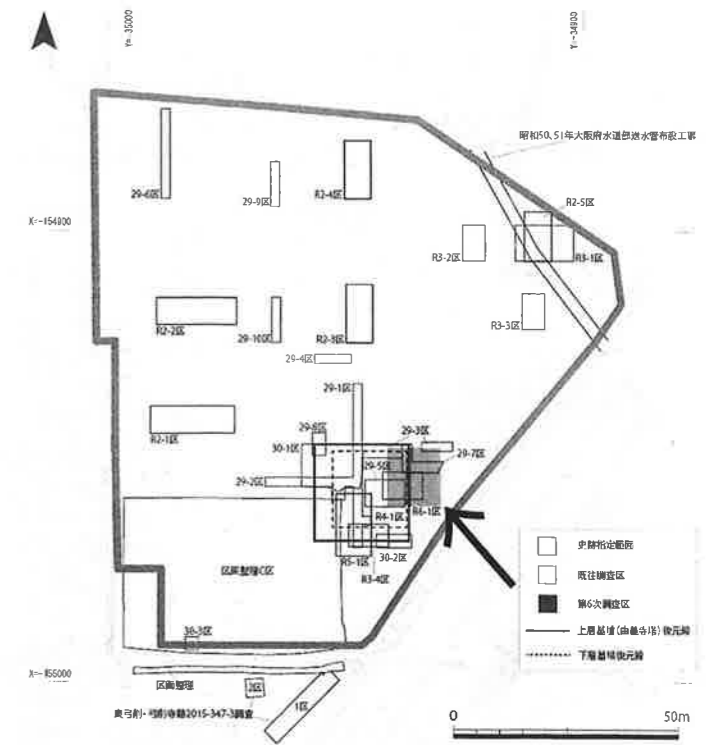
大阪府八尾市

史跡由義寺跡

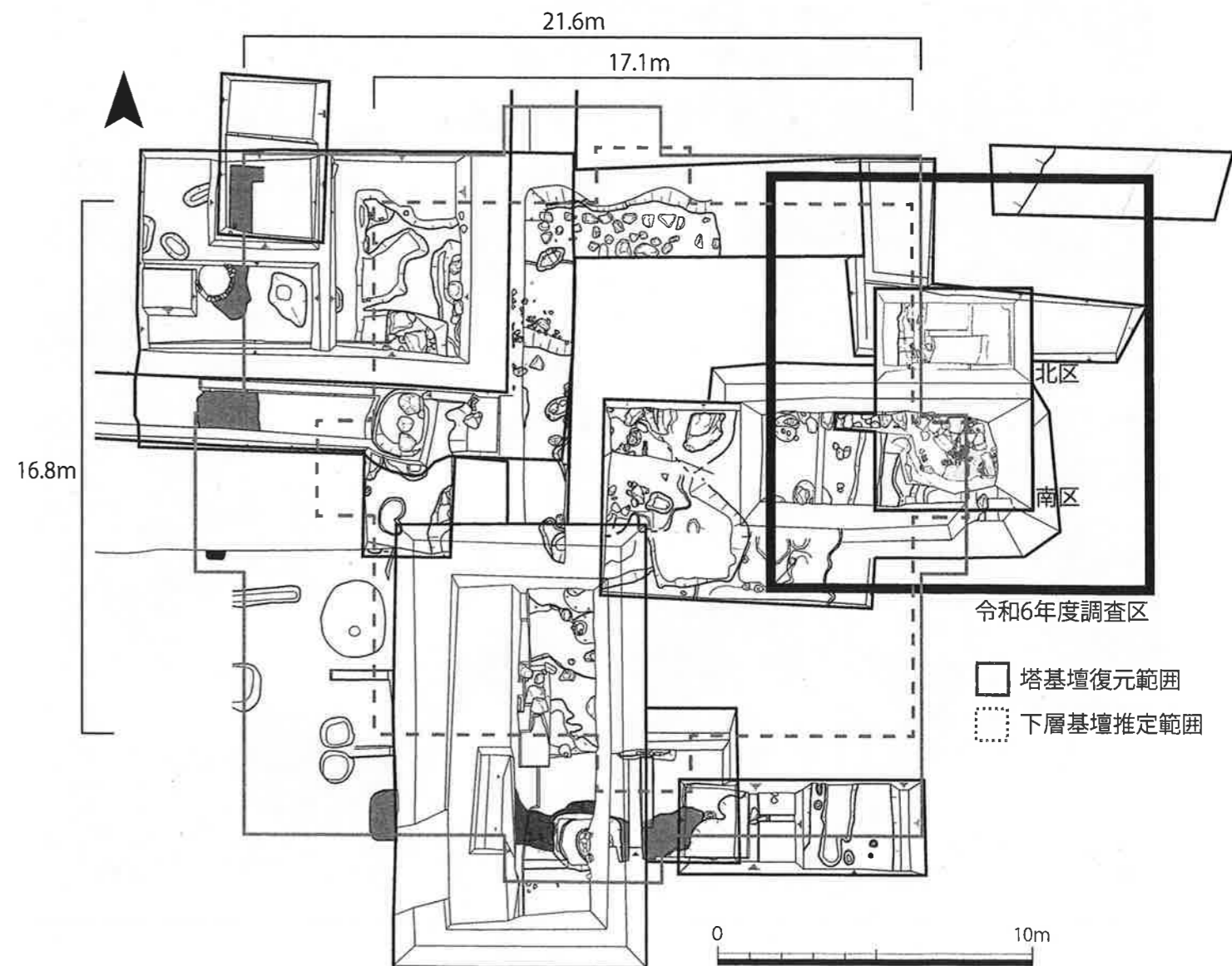
第6次発掘調査現地説明会資料

2024年8月4日(日)

八尾市魅力創造部観光・文化財課



令和6年度の調査位置



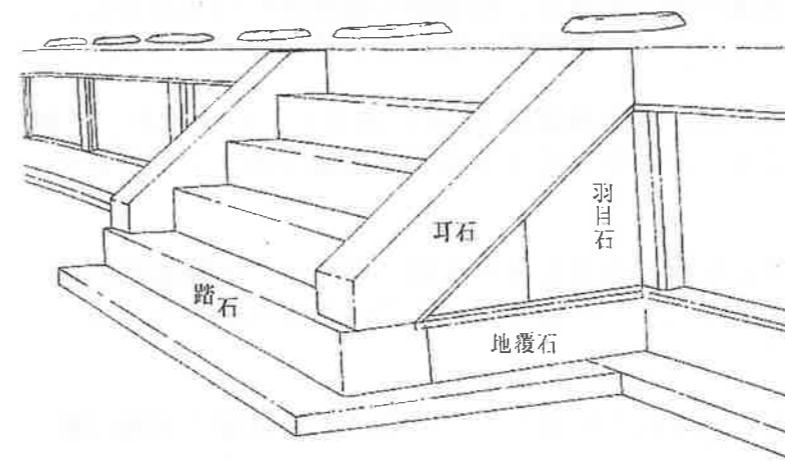
調査区位置図



【南区】上層・下層基壇、下層基壇外装材の検出状況 (東から)



【北区】上層基壇 (由義寺塔) 東端 (北東から)



階段模式図

奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡―遺構編』より転載



(切石積階段の事例)
 鳥坂寺金堂 (柏原市)